

青べか日記

映画文学人生論

原作：山本周五郎（1960年）「文藝春秋」
監督：川島雄三(1962年) 脚色：新藤兼人
出演：蒸気河岸の先生 森繁久弥 撮影：岡崎宏三
芳じいさん 東野英治郎 音楽：池野成
おせいちゃん 左幸子 五郎ちゃん フランキー堺
長 矢野間啓治 きみの 乙羽信子

生は我々に何を与えてくれるのか

蒸気河岸の先生は、『青べか日記』に、「生は我々に何を与えてくれるのか」と記している。

「物音一つしない広い川原。半ば枯れた雑草を戦（そよ）がせて吹く風。淋しい葦の花。静かな日の光を見ていると、人生はまことに侘びしく、生き甲斐なく思われる。全体我は何を求めめるのか。生は我々に何を与えて呉れるのか。酒も女も喧噪も名誉も、みなこれを忘れる手段でしかないのではないか」。

私はこれを読み、『青べか物語』で、ささやんが蒸気河岸の先生に投げかけた問いと比べて、考えた。「人は何によって生くるか」。

ささやんは、出稼ぎにいていた留守に妻と四人の子を一度に失った男だ。モデルがあつたかどうかは不明。大正十二年の関東大震災では青べか村では死者はいなかったが、東京方面から二一人が避難してきたというから、そのときの避難民の一人だったのだろうか。それとも、大正六年九月に台風による高波で四十四人の死者が出ている。妻と四人の子はその高波にさらわれて死んだのかもしれない。

実は蒸気河岸の先生のほうが関東大震災の被災者だった。奉公先の山本周五郎質店が解散したので、関西へ避難しているうちに、『須磨寺付近』で作家としてデビュー。ペンネームは恩人の名前をとって山本周五郎と名乗った。



青べか日記

映画文学人生論

青べか村で暮らすようになったのは関西から東京に帰ってしばらくしてからだ。まだかけだしの作家なので暮らしは楽ではない。「金がない。金が無い。昨日、本を売った。此の代金一円八十銭也。情けなし。今日村の小さな悪党共が鮎を売りに来た。二十銭絞りとられた。家賃が払えない。小さくなっている。笑止」と日記にある。

しかし、希望は失っていない。「苦しみ働け。常に苦しみつつ常に希望を抱け。永久の定住を望むな。此の世は巡礼である」というストリンドベリイ『青巻』の言葉に共感している。それがささやんの問いへの回答なのかもしれない。

二〇一一年三月十一日の東日本大震災では青べか村も被災地になった。死者はゼロだったが、電気ガス水道の供給ストップや液状化などの被害が出た。津波に襲われた東北では、ささやんのように妻子を一度に失った人もいる。

二〇一二年七月二十六日、川島雄三監督の映画『青べか物語』を神田の神保町シアターで観た。ナレーションを多用し、蒸気河岸の先生（森繁久弥）の存在感を工夫している。映像や音楽が効果をあげているが、やはり原作とは違う。

面白い映画だが、これは川島雄三の『青べか物語』だと思った。原作の時は昭和三年から四年。映画の時は昭和三十七年である。

本売って酒ととのへぬ秋の風

曲軒